

# うたとかたりの対人援助学

## 第18回 <不条理>と向き合うためのうたとかたり

鶴野 祐介

今年（2021年）5月30日、日本教育学会関西支部のシンポジウム『教育学のパス論的転回』を読む』において、「<不条理>と向き合うためのうたとかたり—子ども人類学からの問題提起—」と題して話題提供を行った。その概要をご紹介したい。

### 1. はじめに —「憶えておくといひ話」—

2017年3月8日、宮城県女川町女川小学校講堂で、地元の語り部・安倍ことみさんが全校児童約200名を前にして、次のようなお話を語られた。

[要旨]大阪出身で石巻にやってきた<sup>えいぞん</sup>栄存法印は、その高徳な人柄と卓越した指導力によって町の人びとからも領主の<sup>たじま</sup>笹町但馬からも厚い信頼を得たが、但馬の跡継ぎ息子の新左エ門はこれを快く思わず、父親が亡くなると計略によって法印を陥れ、無実の罪を着せて牡鹿半島の沖合にある<sup>えのしま</sup>江島へ島流しにした。江島での日々、法印は、昼間は江島の人びとに広い世の中のことを学んでほしいと読み書きを教えていたが、夜ごと両手の指に蠟燭の灯をともして岩の上に立ち、石巻の方を睨みつけていた。亡くなる前、鯉節一本を啜えたまま自分の体を逆さにして埋めるよう遺言するが、島の人びとが遠慮して逆さにしないで埋めると悪天候が続いたため、逆さにして埋め直すと嵐は収まった。

それから50年後、仙台・片平町の武家屋敷前で子守娘がその家の奥方の子どもを守りしていると見知らぬ僧侶が現われ、その子が誰の子であるのかを尋ねた。そしてその母親が新左エ門の娘であると聞くと「笹

町の血を引く者がまだ生きていたか」と言い、地面に伏して呪文を唱えた。その途端、赤子はひきつけを起こし、子守娘があわてて屋敷の中に入ってみると奥方も倒れており母子ともに亡くなった。人びとは「栄存法印のたたり」と言い伝えたという。

「栄存法師のたたり」と呼ばれるこの伝説の前置きとして、ことみさんは「江島に伝わる三百年ほど前の話で、こわい話ですが、皆さんも憶えておくといひ話だと思うので話します」とおっしゃった。

そして、ことみさんが語り終えた後、司会を務めておられた先生が、「皆さんも江島の人々のように広い世の中のことを学んでいってください」とコメントされた。

講堂の隅で参観していた私は、次のようなことを自問していた。毎週1回小学校を訪れ、1つのクラスに入って民話語りをしてこられたことみさんが、1年間の活動の最後にこの話を選んだのは何故か。「憶えておくといひ話」とおっしゃった真意は何か。そして、司会の先生のコメントは、ことみさんの「憶えておくといひ」という意味内容にふさわしいものだったのか、もしも自分が先生の立場だったら、どのようなコメントをしたらどうか……？

あれから4年余りが経った今も、これらの問いへの答えは見出せないままである。無実の罪を着せられて命を落とした主人公が祟りをなして復讐するという、本話のような理不尽で不条理な物語に対して、子どもたちが向き合う機会を回避するよう、教師は

配慮し、もしくは取り繕ってきたのではないか。それは学校教育の本質的な属性と言うべきものであり、教育学における〈パトス（受動性・感情・情熱・受苦 etc.）〉の問題を考える上での重要な論点ともなるのではなからうか。

## 2. 物語の起源としての〈不条理〉甘受説 一人類学的物語論一

人は何故物語を生み出し、語り継いできたのかという、物語の起源論については諸説あるが、その一つに〈不条理〉甘受説とも呼ぶべき系譜がある。

18世紀英国の哲学者デイビッド・ヒュームは次のように言う。生老病死や天変地異をはじめ、因果律によっては決して解き明かし得ない〈不条理〉な事態に遭遇した時、その〈恐怖〉から逃れるために、また一縷の希望を与えてくれることを願って、人は〈神〉を誕生させ、そして〈神〉に祈った――。

19世紀後半、ドイツのマックス・ミュラーや英国のジョージ・コックスといった比較神話学者たちは、「古代人」の太陽や月や星の運行や気象など大自然に対する〈驚異〉や〈畏怖の念〉が神話を創造させたと言った。これを批判的に継承したエドワード・タイラー、アンドリュー・ラング、ジェームズ・フレイザーなど英国の人類学者たちは、こうした「古代人」の発想を、人類の進化における「未開」の段階にある人びとが共有する世界観であると捉え、森羅万象に共通する霊性（アニマ）を見出そうとする「未開人」の観念を「アニミズム」と呼んだ。つまり「未開人」のアニミズム的世界観が、自分たちを取り巻く大自然の諸現象や生老病死という生命にかかわる諸現象に対する〈驚異〉や〈畏怖の念〉と結びつくことによって、神々の物語すなわち「神話」が生まれ、そこから昔話や伝説などの民間説話が派生していったと見たのである。

20世紀ドイツの哲学者ハンス・ブルーメンベルクは『神話の変奏』において、「現実によって論破されなかった物語が何千年も語り継がれてきたのは、

圧倒的な現実に対抗して生き抜くためだったに違いない」と主張した。すなわち、現実による絶対支配に対して、恐ろしいものに対抗するイメージを創り出すこと、つまり未知の対象に対抗する主体を想像力によって確保しようと試みて物語を創出し、これによって、現実による絶対支配を解体しようとしたと指摘する。すなわち、現実の〈不条理〉な事態において立ち現れる〈不可視のもの〉や〈不可知のもの〉、あるいは〈漠然たるもの〉に対する〈恐怖〉もしくは〈驚愕〉を払拭するために、人はこれらに名前を与え、この名前を使って物語を語ろうと試みてきた。そこに物語の根源的な意味を見たのである。

このように、〈不条理〉に向き合うため、もしくはこれに立ち向かうために、人は〈神〉を生み出し、神話をはじめとする物語を語るようになったとする〈ホモ・ナランス（語るヒト）〉としての人間存在論が展開されてきた。

## 3. 日本の民間説話の中に刻まれた〈不条理〉

古来より、地震・津波、洪水、旱魃、飢饉、パンデミック、戦争等、〈不条理〉と呼ぶべき様々な災厄に人びとは翻弄されてきた。そしてその出来事を、うたやかたりの中に刻み込んできた。

日本の民間説話の中にも〈不条理〉を刻んだものが数多くある。例えば、宮城県気仙沼市には「みちびき地蔵」と呼ばれる地蔵にまつわる伝説がある。

昔、気仙沼の大島にあったこと。若いおかみさんがねえ、小さい男の子連れて働きにいったんだねえ。そすてほの、一生懸命働いて、夕焼け空もすみかけの頃ねえ、ひと暗がりになつとこ、そのお地蔵さんのある山を越えてねえ、帰ってきたんだと。

そすたらその地蔵さまの近くへきたら、なんだか、がやがや、がやがや、人が大勢でねえ、その地蔵さまを拜んでたつて。あらあ、見たらばどこそれのおばあさんもいれば、どこそこのこゆう人もいれば、あら、こいうおんちゃんもいるってねえ、不思議で、子どもの口

もふさいで黙って見てたんだと。近所の人もくれば、知っている人がぞろぞろきて、その地藏さんのとこさ拝んで、そすてほの人が飛ぶようにすていくと、別の人がまたきて、牛と馬も四頭もきたってねえ。で、みんな飛ぶようにいなくなってすまったんだと。

おっかなくておっかなくて、ほて(=そして)うちさきてから、父っさんに話したんだってねえ。いやいや不思議なこと、でもめったなこと語られねえから人には語んなよってねえ、ゆってたら、二日、三日たったらねえ、大津波がきたんだってねえ。

そすてねえ、津波きてみんな逃げたんだけども、逃げ遅れた人がひき波でみなさらわれて、そこでねえ、がやがや、がやがや、大勢きて拝んでいた人たちが、全部死んだんだと。牛と馬も四頭、みんないなくなると、それからみちびき地藏と名前つけられたんだと。ほれ、死ぬ人をみんなみちびくって(松谷みよ子編著『女川・雄勝の民話 岩崎としゑの語り』国土社 1987、168-169)。

みちびき地藏は宮城県気仙沼市大島の田中浜に実在し、気仙沼出身の民俗学者・川島秀一によれば、いつごろから「みちびき地藏」と呼ばれたかは不明だが、1770年代に祀られた記録があり、昭和の時代にお堂が建て替えられたという。

2011年3月の大震災による津波で地藏堂は全壊し、地藏も石仏6体と共に流失したが、地元住民と支援者たちの力により、新しいみちびき地藏3体と石仏6体が制作され、2012年10月地藏堂も再建された。2013年7月、流失していた石仏3体が発見され、現所在地蔵堂には、3体のみちびき地藏と、発見されたものを含めて9体の石仏が祀られている。石仏を発見した地元の女性は「みちびき地藏は霊を導き、石仏は地域を見守ってきた。がれきの中から出てきてくれたのは、島の復興を見守るためだろうか。みんなで末永く大切にしたい」と話したという。

また前述の川島は、「昔、大きな地震があったとき、逃げ惑う人々に指示を出した人がいました。この人の後を付いて行って助かった人々が、お礼をしよう

と思って探しましたが、結局見つからず『あの人はお地藏様だったんだ』と言われたそうです」という別の話があるとも語っている。

地藏が津波や洪水を予告したり、その災厄を回避させてくれたりする話や、地藏の予告を無視したために災厄に遭うという話は全国各地に伝わる。それは地藏の功德を説く「仏教唱導」の物語と解釈することもできるが、突然わが身に降りかかった<不条理>に対して、これを<合理化>し、自身を納得させることで<不条理>を甘受しようとしたものと見ることでもできるのではなからうか。

#### 4. 日英のわらべうたの中に刻まれた<不条理>

英国の手つなぎ輪遊びに歌われるわらべうた“Ring-a-ring O’ Roses”は、17世紀のペスト大流行(パンデミック)を歌ったものとの説がある。

Ring-a-Ring O’ Roses,

A pocket full of posies,

A tishoo! A tishoo!

We all fall down.

バラの花輪だ 手をつなごうよ、

ポケットに 花束さして、

ハクション! ハクション!

みいんな ころぼ。

「バラ」はペストの症状の赤い発疹、「花束」はペストを防ぐための薬草の束、くしゃみは病気の末期症状、そして最後にみんな死んでしまうと解釈されるのだという。この詞章が文献に登場するのは19世紀末(1881年)のことであり学術的には疑わしいとされるが、英国ではよく知られた逸話である。

一方、岩手県遠野のお手玉唄「おつつおひとつ」は、江戸時代宝暦・天明の飢饉による集団入水自殺を歌ったものとされる。

おつつ おひとつ おひとつ おひとつ

おふたつ おふたつ おみつ

…

いつあき 五朝 五朝限り 五朝一緒にたんたんたきみず滝水

明日は蓮華の花盛り 友来い ただ道来い  
…

最後の二連は、朝一回のほんの少しの食事も五日限りで尽きてしまう、その時には「早池峰<sup>はやちね</sup>の御山の神様が迎えてくださるからみんなで行こう。滝へ入れば明日は極楽浄土だ」とうたったものだという(阿部ヤエ『人を育てる唄—遠野のわらべ唄の語り伝え—』エイトル研究所 1998: 229)。

以上のような<不条理>な災厄の記憶を刻み込んだうたやかたりは、これを聴く子どもに対して、「生きるということは<不条理>と向き合うことだ」という人生観を伝達する機能を担っていたように思われる。だが学校教育において、そうした人生観は極力遠ざけられてきた。また教育学の主題となることも回避されてきたのではあるまいか。けれども、東日本大震災をはじめ相次ぐ自然災害を体験し、今また新型コロナウイルス感染症という新たな災厄を体験している子どもたちにとって、<不条理>と向き合うことの意義はきわめて大きいと思われる。

但し、そうした<不条理>によって不安や恐怖を募らせ、悲嘆や絶望に苛まれる事態へと子どもたちを陥らせてはならない。「それでも上を向いて」、彼らが一步前に踏み出していこうとするための手立てを、同時に私たちは用意しておく必要があるだろう。

## 5. おわりに—教育学のパトス論的転回に向けて—

とはいえ、私自身、確信を持って提示できる「手立て」があるわけではない。今ここで言えるのは、<不条理>な唄や物語を子どもたちに(追)体験させているその間、子どもたちの傍に佇み、共に悩み苦しみつづ、彼らが<狭き門をくぐる>姿を見守ること、そして安直に答えを出さない/求めないことが肝心だと思われる、それだけだ。

いつか彼らが「人生の踏絵」(遠藤周作の言葉)に直面した時、<不条理>なうたやかたりを思い出すことがあるかもしれない。その時、こうしたうたや

かたりは、「頑張ろう!」よりも「絆を大切に!」よりももっと深い拠り所として、子どもたちの人生を支えてくれるはずだ。ことみさんが「憶えておくといい」とおっしゃった真意とは、そういうことなのではないだろうか。

作家の上橋菜穂子が、ある講演会で次のように語っていたのが思い出される。——自分は子どもの時、祖母から恐ろしい話や残酷な話をいっぱい聞いたが、祖母の膝の上で聞いていたので、怖かったけれど安心だった。以前、講演の後で、「読み聞かせの中で、残酷な話を読んでいいと思いますか」という質問を受けたことがある。その時自分は、「それはその本の内容の問題ではなくて、誰が読むかが問題だと思います」と答えた。子どもにとって、母親や祖母の膝の上で、あるいは家族みんながいるところで、怖い話を聞いたり読んだりする時には、たとえその内容が引きつけを起こして泣く程怖いものであったとしても、それによってトラウマになったり心が歪んだりすることはない——。

作家・森崎和江の、4歳の娘との以下のような逸話も印象深い。——「あのね、ママ、死ぬのこわくない?」そうささやきました。泣きじゃくりながら。私はどきりしました。……ちいさな子の魂が、大人とすこしもちがわない大ききでそこにあるように思われて、私は息をのみました。……「あのね、みんな、こわいのよ。…でもね、元気よく生きるの。ママもずっとひびきといっしょにいるから。……ごめんね」。いいたいことは胸いっぱいにあるけれど、4歳の子に伝えることばも力も持っていないのです。……そのうち、子どもの方が先に落ち着いてきました。私の背へ、短い腕をのぼして、なでながらいいました。「泣かないでね。もうこわいこと言わないから。大丈夫だから……」(森崎和江『大人の童話・死の話』弘文堂 1989 pp.46-47)。

<不条理>な世界に立ち向かう子どもたちの傍に佇み、時に涙を流し、時にオロオロ歩きながらそっと見守る<テクノポー>であろうとすること、そこに教育(学)の原点がある、そんな気がしている。